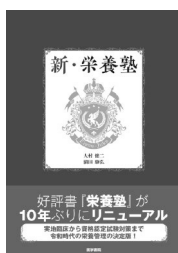


書評

[評者]

佐々木雅也

滋賀医科大学教授・基礎看護学/滋賀医大病院栄養治療部長



新・栄養塾

大村健二，濱田康弘 編

●B5 頁288 2020年1月

定価：本体3,400円＋税

[ISBN978-4-260-04135-5]医学書院刊

もう10年以上前の話である。日本臨床栄養代謝学会(旧：日本静脈経腸栄養学会)のNST専門療法士にかかわる委員会に初めて参加した際に、外科系の先生方の熱心な議論に圧倒された記憶がある。その議論の中心におられた先生方のお一人が、大村健二先生であった。小生は、内科系の医師が少ないとのことで委員に加えていただいたのだが、先輩の外科の先生方の前で、なかなか声があげられなかったのを覚えている。中でも大村先生は、専門とされる消化器外科学はもちろんのこと、生化学の知識が豊富であることに驚かされた。臨床医としての多忙な日々の合間を縫って、生化学の教科書を精読されているように感じられた。

その後、その委員会の委員長を小生が引き継ぐことになった。その際、新しく委員に加わっていただいたのが濱田康弘先生であった。私と同じ内科系であったが専門領域が異なり、濱田先生は腎臓病学を専門とされておられた。濱田先生も生化学や生理学の知識が豊富であり、また当時から仕事の正確さが際立っておられた印象がある。

大村先生と濱田先生は、いずれも私が尊敬する医師である。そして、そのお2人が執筆されたのが本書『新・栄養塾』である。

栄養学という学問は、ダイナミックな、動的な学問である。そしてその基礎になるのは、生化学であるのは言うまでもない。したがって、栄養アセスメントにおいても、血液学的な数値を単純に評価するだけでは意味がない。そこには、動的な栄養代謝病態が考慮されなければならない。また、栄養代謝には複数の臓器が巧妙に関連し、1つの生命体を成立させている。さらに近年では腸内細菌叢も、新たな臓器としての意義が論じられている。栄養学は、実に奥深い学問である。

本書は、「I. 栄養管理に必要な基礎知識」、「II. 臨床栄養 実践編」、「III. 臨床栄養 病態編」「IV. 栄養管理のスキルアップ」の4章から成る。特に、基礎知識としての解剖・生化学・生理学の解説が充実している。しかも、単なる栄養学の成書に留まらず、まさに動的な観点から栄養代謝を解説されているのが特徴である。また実践編は、実際に臨床の第一線で活躍されている医師ならではの目線で解説されている。補講として、「トランス脂肪酸」など4項目が取り上げられ、いま知っておきたい項目が追加解説されている。

このように、本書は1人で読んでいても、教科書を読んでいるときのような飽きがこないし、むしろ楽しい気持ちになる良書である。